「相中相高百年史」より

（　戦時体制下の相馬中学校　８　）

８　学徒動員：五年生（ 相中第 43 期生 ）・・・ペンをハンマーに

（２）想い出の記より「異例づくめの中学時代」中 43 回卒　佐藤 信昭 (※1)

昭和 15 年４月、緊張と期待感に胸を膨らませて相中の門をくぐったのは、55 年程前のことである。翌２年生の時は太平洋戦争が始まり、卒業直後の 20 年８月に終戦の日を迎えた。まさに戦時体制下の中学時代であった。通常の授業日は削減され、代って勤労奉仕作業や軍事教練・演習、そして学徒動員での工場生活が行われた。平和時では考えられない異例づくめの中学時代であった。

例えば２年生の時、夏休みを一部返上して全校生による校庭の地盛り作業があった。入学した当時、南庭と呼ばれた中庭は中央部が低く、降雨の度に満水して池のようになった。ゲートルに下駄履きの私たちは、苦労した。二人一組となって縄で編んだ土砂運搬用具「もっこ」に丸太を通して土砂を運んだ。灼熱の太陽の下、西山地内の山を崩して土運びが終日、続いた。南庭の大改修は、こうして完成した。苦しい作業ではあったが自力でやれたという成就感はあった。

３年生の時の昭和 17 年から翌 18 年にかけて、戦局は次第に苛烈となり、農家の若い働き手は、相次いで召集された。その留守家族の援助のため授業日に出動を命ぜられ、田植え、除草、稲刈り、果樹の手入れ等の農作業に汗を流した。

４年生の昭和 18 年春、原町にあった陸軍の飛行場へ、軍用機の防空待避壕作りのために出動を命ぜられた。原町駅から凡そ４キロメートル西方の飛行場へ徒歩で通った。すべて手作業で二人一組となって土を担ぎ上げるというものであった。壕の土手が次第に高くなり、急な傾斜を運び上げるのは、かなりの重労働であった。作業中に左足の踵に靴底を通して古釘を刺し、化膿して腫れ上がった苦い思い出もある。

この４年生の秋は、京都・奈良を夢見た修学旅行の筈であったが中止となり、代って磐梯山麓の軍の摺上原演習場で、一週間の軍事演習に参加した。各班に分かれて、現役の将校と下士官による、きびしい軍隊生活を体験した。演習の最終日の未明、非常呼集のラッパに跳び起き、山麓の兵舎から猪苗代湖畔まで銃を担ぎ、息を弾ませて、駆け降りた翁島の思い出も、今となっては懐かしい。

昭和 19 年、中学校生活に有終の美を収めたいなどど考えていた５年生の７月、学徒動員令によって、懐かしい母校の校舎を後にした。

凡そ９ヶ月間、福島市郊外の軍需工場、日東工鉱業で働くこととなった。全く予想していなかった体験であった。引率の先生方は、相中生の誇りを保つよう繰り返し強調された。学校生活とは、異なった環境で、何とか元気に働いた。しかし伸び盛りの身体は、工場から出される食事の量では到底、足りず、いつも空腹を抱いて働かなければならないつらい毎日であった。親たちが日曜日に、当時の困難な食糧事情の中、工面して運んで来てくれた握り飯などが唯一の楽しみであった。

工場の屋上から故郷の方向に広がる白雲を見つめて、家族を想い、夜は灯火管制で仄暗い電灯を引き寄せて、進学のために勉強もした。２月にこの工場の寮から、夫々、大学、高等学校、専門学校等の受験場に向かった。

卒業の日がやって来た。３月 26 日。卒業式は、工場内の聖堂と呼ばれた集会場で行われた。父母たちも、来賓もいない、校長先生と引率の担任の先生方だけの淋しい卒業式であった。

卒業式の翌日、当時の鉄道輸送の事情により集団で乗車できず、全員、福島市から故郷の相馬へ歩いて帰ることとなった。早春の霊山下を通り玉野を経て、鹿島のわが家へ向けて延々と歩いた思い出が、今、甦る。

太平洋戦争のさ中に、巡り会った、真に、希有な中学時代であったと言えよう。深い友情に結ばれた旧友、お世話になった恩師が懐かしい。

（※１）鹿島出身

（転記文責　村山）